

「大坂の史跡を訪ねて」連載36回目

オサタニ ヨシハル
長谷 吉治

【坂本龍馬ゆかりの大坂史跡】

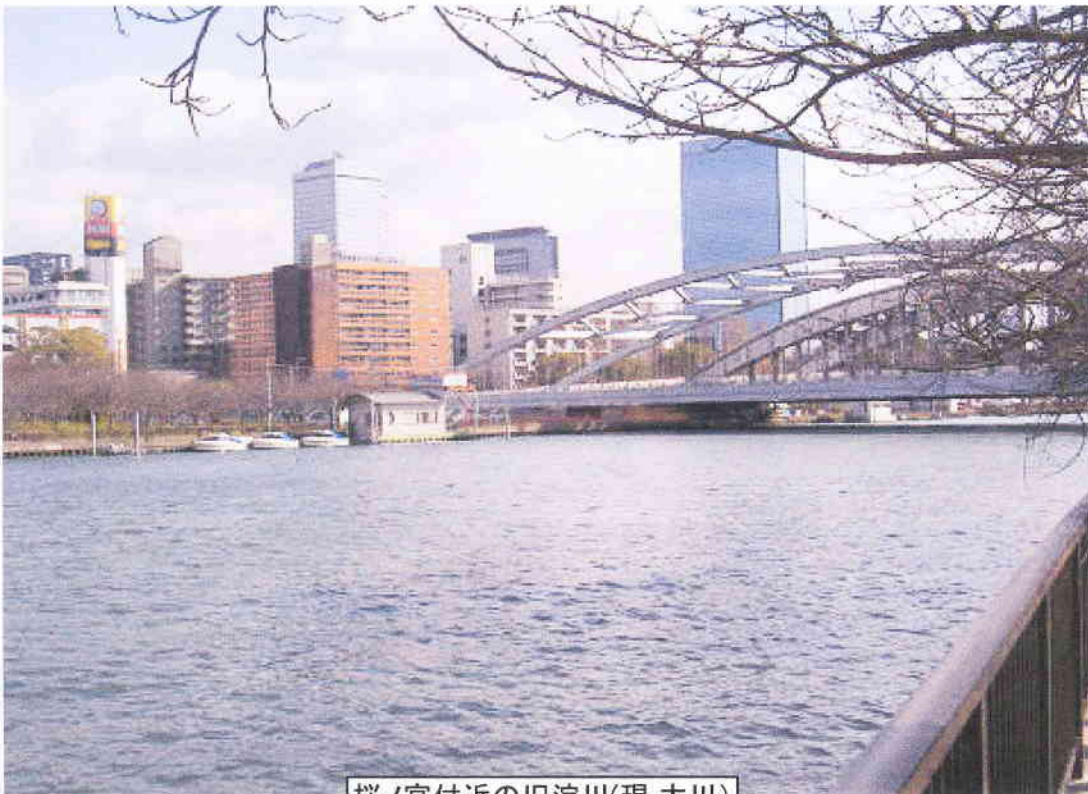
今回も、前回に続き「坂本龍馬」に関連する大坂の史跡をご紹介します。これまでご紹介した箇所と重複するものもありますがご了承ください。

1 長州藩士62人捕縛の地(旧淀川) 北区天神橋、都島区中野町

- ▶ 元治元年(1864)7月18日「蛤御門の変」が起こり、敗戦した長州藩兵 宍戸久之進ら62名の兵士たちは、伏見から舟で淀川を下ってきます。大坂の桜宮付近で高松藩に捕えられ、千日前刑場の獄舎へ投獄されました。ここでは、幕府による極めて残酷な扱いを受けたようです。半年以内に刑死者6名、牢死者39名を数え、一説には一人ずつ毒殺したともいわれています。ここで亡くなった45名の死骸は、犬猫同様無造作に、刑場片隅に埋められたそうです。明治期に入り、賊として扱われたこの長州兵士らは、勤王の志士として評価されます。明治2年(1869)夏、夕陽丘にある大江神社一角に招魂社を建て慰霊・顕彰を行いました。

司馬遼太郎 著の小説「竜馬がゆく 五 (文春文庫)」のP186から抜粋します。

「わしが斥候になる」と(勝 海舟は)葦山笠をかぶり、城(大坂城)をとび出した。途中、竜馬の宿に立ちよって竜馬を連れ出し、「君を連れてゆけば天下無敵だ」と冗談をいながら、桜宮(さくらのみや)へ出、淀川堤を北上しはじめた。(途中省略)竜馬は、北の天を見あげた。薄っすらと、黒煙が空を染めている。「京都は燃えていますな」「あんたは」と、勝はこの倒幕論者の門人をみた。(途中省略)勝自身の文章を借りよう。「桜宮より数丁すぎて、淀川上流より一船飄々として(ただよいながら)来る」船を見たのだ。-竜さん、あれを見な。と、勝は指さした。竜馬は黙っている。「船内に、壮士三人あり(途中省略)」「長州人ですな」と竜馬はしずかにいった。(途中省略)「忽ち差し違ふ」あつ、と勝も竜馬も息をつめた。長州人たちは、たがいの胸ぐらをとって、刺しあつて折り崩れた。自殺したのである。残った一人も、立ったまま、喉を刺しつらぬいて死んだ。このすさまじい光景をみて、勝は京都方面での長州軍の敗北を知った。



桜ノ宮付近の旧淀川(現 大川)

2 安 治 川

- ▶ 大坂の町から天保山に行くには安治川を通ります。中之島西端で堂島川と土佐堀川は合流し、そこからは安治川と木津川に別れます。安治川は大川(旧淀川)の続きになります。安治川は福島区と西区の境を流れ、やがて河口で六軒家川と合流し、此花区と港区の境で大きく川幅が広がり大阪湾に流れ着きます。埋立が進み、現在の河口は天保山と桜島の境付近となっています。安治川は江戸初期に河村瑞賢によって開削され、初めは新川と呼ばれました。天保年間に大規模な川ざらえが行われ、その土砂で築かれたのが天保山です。

司馬遼太郎 著の小説「竜馬がゆく 四 (文春文庫)」のP28から抜粋します。

「どこへ行った」「安治川口のほうだす」と、旅籠の女中はおそろしそうにいった。おそらく寄ってたかって乾(乾十郎)はやりこめられていたのであろう。「陸奥君、安治川口なら、人家もまれば、斬る気だろう」竜馬は歩きだした。「相手は十三人だそうです。坂本さん、大丈夫ですか」(途中省略)安治川口の土手には、人通りがたえている。土手に、この土地の名物で、船よび松、というさがり松が、水面に影をおとしている。兜(兜 惣助)らは、土手下の草のなかにいた。(途中省略)この頃、陸奥宗光側の資料ではとくにくわしい。右の一条(安治川口)よりして又もや騒動起れり。其の仔細はと言ふに、惣助は坂本等が己に何等の掛合もなくその場に踏み込み十郎を助けしはすこぶる傍若無人のふるまひなりとて大いに怒り、坂本へ向け果状を付け、その場所を定めて返答あれと申しきたる。坂本は少しも動ずる色なく、その使にむかって、天王寺境内に於ていつでも勝負せん、と空嘯き居たり。沢村惣之丞、かくと聞くより一大事なりと大坂城内に入りて勝のもとへ斯くと注進す。勝もそのまま捨て置けずと小笠原図書頭に相談なし、惣助を呼んで之を慰諭しつつ漸く無事の落着を見るに至りしと。



現在の安治川



3 伝坂本龍馬潜伏の地

- ▶ 宮本又次著の「大阪商人」には次のように記載されています。

「維新当時の志士で薩摩屋の世話にならざるもの無しというほどであった。坂本竜馬の如きも、大阪にて幕府の士に付け狙われたので、半兵衛父子に保護せられ、江戸堀の邸宅内に、あるいは菩提寺の法性寺に身を匿したことがある。」

神戸海軍操練所の閉鎖後、行き場を失った坂本龍馬や土佐脱藩浪士らは勝海舟の尽力により、薩摩藩に匿ってもらいます。その後、亀山社中へと発展していくのですが、龍馬と薩摩藩は、濃密な関係を持ちます。そのような点から考えると、薩摩藩の御用商人であった薩摩屋半兵衛とも関連があった可能性があります。海援隊は、大阪出張所(屯所)を「薩万」に設置していました。この薩万は、岡内俊太郎(土佐藩)が同藩の佐々木高行にあてた手紙によりますと次のような記載があります。

中央区中寺1-1(法性寺)



坂本龍馬像(亀山社中)

「龍馬、(中島)作太郎等は薩邸の前に薩摩屋家ありて、此家に行き、高松太郎、白峰俊馬、菅野覚兵衛等居合わせ居り、将来の事を戒め含め置き、大坂を発して京都に登り(以下省略)」

この薩摩屋は薩万をさしていますが、半兵衛が龍馬ら海援隊を援護した可能性は強いと考えられます。

龍馬の法性寺潜伏に関しては資料不足で、この「大阪商人」だけでは断定できませんが、上記のように考えると可能性も低くは無いと思い、今回ご紹介に至りました。

4 土佐藩住吉陣屋跡

住吉区東粉浜2

▶ 幕末、大坂の海岸警護のために土佐藩が幕命により築いた「土佐藩住吉陣屋」についてご紹介します。

司馬遼太郎著の「竜馬がゆく」(文春文庫第3巻 P34～)では次のとおり紹介されています。

「場所は、住吉村中在家にある。幕府からの拝領地に建てたもので、敷地は一万七十九坪七合五勺。海浜に面し、構えは、ほとんど城郭といいいい。土佐藩では、「住吉陣営」と通称していた。幕府が、外国陸戦隊の堺上陸にそなえて建てさせたものである。故東洋(吉田東洋)が、幕府の機嫌をとるために、必要以上の経費を投じて造営した。武装も相当なもので、沿岸に砲台をつくり、陣中にはオランダから購入したゲベール銃五百挺を用意し、陣営の指揮官には家老級を置き、藩士五百人を収容している。」

<完成までの経緯>

万延元年(1860)7月、大坂・兵庫・堺・和歌山などの海岸警護のため、幕府は次のとおり各藩に警衛を命じました。

○大和川流域:柳川藩 ○大和川より尻無川:土佐藩 ○尻無川より安治川:鳥取藩

○安治川以北:岡山藩 ○兵庫:長州藩

土佐藩は同年8月、幕府より住吉の地を譲渡され、翌年の文久元年(1861)5月に陣屋を完成させています。

この工事は、材料である木材、石、大工や人夫はすべて土佐から調達しています。

作時奉行に寺村左善、普請奉行に後藤象二郎があたり、当時の参政 吉田東洋も現場を視察するほどの力の入れようでした。

慶応元年(1865)には山内容堂も、視察のために住吉陣屋を訪れています。



山内容堂



吉田東洋



後藤象二郎



谷干城



吉村虎太郎

<陣屋の規模>

陣屋は約3.3ヘクタールもの広大な土地に、紀州街道(現在、阪堺電気軌道阪堺線が走っている道路)の東沿いに正門を設け、南北約360m、東西約140mの長方形になっていて、東側の上町台地西崖を除いた三方向に堀を巡らしていました。

中は正門そばに陣屋本殿があり、その奥の東隣に武芸所の文武館がありました。

そのほか、厩舎、火薬庫、射撃場、操練所があり、300名が常駐していたそうです。

<陣屋に勤務した人物、訪れた人物>

最初の陣屋警備は総指揮役である中老 山内左近が、馬廻頭を山田八右衛門が務めています。

そのほか、坂本龍馬ともゆかりのある 間崎哲馬(滄浪)、望月清平、清岡道之助、谷干城などが陣屋に勤務していました。

訪れた人物としては、文久2年(1862)4月8日に吉村虎太郎が本間精一郎を連れて来ています。

島津久光の上京により一気に倒幕へ向かわせようと、上士を説得させるためであったといわれています。

手紙を

「(最初省略)大坂八軒家につき申、御やしの近江宿をとり、夕方勝先生の御旅宿江参り候処、せんせいはいまだ用事これあるおもむきにてふなで延いん、同九日、本町三丁目、せんせいの御りよ宿にとふりう、すみよし御ぢんやに行申候。」



<陣屋跡のその後>

<陣屋の遺構>

慶応2年(1866)、土佐藩は京都の警衛を命じられたため住吉陣屋の警備を免じられ、陣屋は撤去されることになりました。

慶応3年(1867)7月、京都北郊外白川村にある土佐藩邸内に、中岡慎太郎を隊長とする陸援隊が新しく組織され、住吉陣屋の建物の主要部分が、この陸援隊本営に移築されています。

しかし、中岡慎太郎は、坂本龍馬と共に慶応3年11月15日、京都近江屋で暗殺されてしまい、陸援隊は翌年1月に解散となります。

その後、陸援隊本営は姿を消し、今は見ることはできません。

ただ、住吉陣屋の石垣に使われていた石が、住吉陣屋のあった場所からさほど遠くない、生根(いくね)神社に一部移築されています。

今でも住吉陣屋の遺構として見る事ができる唯一の場所です。

境内の北西に絵馬堂という建物があり、その西が崖になっています。

その崖の部分に使用されている石が、住吉陣屋の石垣として使用されたものです。



土佐藩住吉陣営に使用されていた石垣(生根神社)



石垣部分を拡大

6 陸奥宗光及び陸奥家墓所跡(稱念寺)

天王寺区夕陽丘町5-14

- ▶ 伊達宗広は、明治10年(1877)5月に病死。遺言により宗広が隠棲した「自在庵」の地に、墓を建て埋葬されました。その後、陸奥宗光をはじめとして陸奥家の墓所となりました。昭和28年(1953)、遺族が墓所を寿福寺(神奈川県鎌倉市)に移葬することとなりました。しかし、現在でも当時の面影が残されています。

唯一、大阪での史跡案内板や石碑に「坂本龍馬」が記載されている箇所陸奥宗光墓所跡にある「夕陽岡阡表と陸奥宗光に追慕の意を表す碑についての説明板」に坂本龍馬の名が登場します。



夕陽岡阡表と陸奥宗光に追慕の意を表す碑についての説明板